地域と学校　その10

「壊れ窓理論」で子どもを見守る

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

もう卒業式の時期がやってきました。石樽（いしぐれ）小学校の卒業式は毎年、卒業生と在校生が向き合って、お別れの言葉とお礼の言葉を、これまでの出来事や思い出を交えながら大きな声で交わします。今年も卒業生は中学校の制服を着て式に臨み、在校生の演奏と手拍子の中、退場していきました。残った在校生は、卒業生が退場してぽっかりと空いた席を見て一抹の寂しさを感じながらも、新しい学年へと心が動いたのではないでしょうか。

さて今回は、新校舎計画の1年間を締めくくる議論や公開ワークショップの様子をお話しします。

委員長の挨拶

建設委員会では、委員長Otさんによる会議冒頭の挨拶が一つの楽しみでした。型どおりの挨拶ではなく、その季節の話題やOtさんの身の回りであったことを、新校舎計画の議論にあわせて話されたのです。例えば、福祉学習やバリアフリーの検討の回（第13回）には、1カ月前の運動会に電動車椅子で来ていた方が通路で立ち往生していた様子を振り返りながら、「ちょっとした工夫と配慮でみんなが来てくれる学校にしよう」とか。地域開放ゾーンの管理運営の議論の前には、鈴鹿の小学校が老人会を招いて昔の遊びで盛り上がった話を紹介しながら、「石樽にもいろんな団体があるので、子どもたちと交流したら」とOtさんの意見を交えて話されました。

最近、この挨拶についてOtさんに尋ねましたが、特別に準備したのではないとのこと。でも、こんなオープニングトークが、それも地元の方からされれば、出席者の頭のスイッチが入ってスーッと本題に入っていけたでしょう。私も会議の座長を任された時、どうやって本題に入っていこうかと考えます。しかし、前回のおさらいをしながら今日の本題へとつなげるのが関の山です。

どうやって管理運営するの？

2002年も押し迫った12月の建設委員会（第14回）では、授業参観日に検討中の新校舎の模型が展示されたことが報告されました。少しずつ父兄や子どもたちに、計画に触れ、理解する機会を作っていこうとする試みが始まりました。

また、建設の工期の説明がありました。新校舎は2003年秋に着工し、2004年暮れに竣工という見通しです。工事中に子どもたちが安全に通学でき、また支障なく学校生活が送れるようにとの要望が、改めて建設委員の方々からされました。

一方、子どもたちの学習に関する教室周りの計画については、設計事務所と学校の先生方が検討を重ねており、また地域開放ゾーンの計画の大筋も固まってきたので、新校舎が有効に活用されるように今から石樽全体で考え、動き出すべきではないかという意見が出始めました。建設委員会を中心に地域利用や運営の仕方を考えよう、各自治会で話し合おうということです。

そこで、まず管理運営について何を議論しなくてはならないかを知ろうと、年が明けて開催された第15回委員会では、

・卒業生を見送る（2007年3月の様子）
わっか型の校舎のオープンスペースを卒業生が練り歩き、在校生が拍手で送ります。新校舎になってからの光景です。

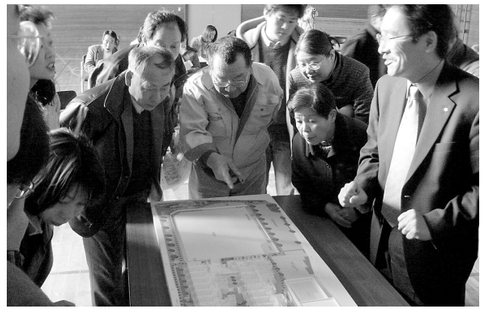
設計事務所から吉備高原小学校（シーラカンス設計）の管理運営状況が紹介されました。この小学校では、ボランティアが図書の貸し出し業務を行ったり、地域総出で年に2回、学校清掃を行っていることや、教員とPTA、自治会関係者、教育委員会からなる管理運営母体が設立され、利用者の声と学校開放の運営を取りまとめていることが紹介されました。

第16回委員会では、具体的な管理運営の課題を確認しあいました。管理については使用許可の手続きや判断、鍵の受け渡し方法、利用時のマナー、清掃方法などの課題があり、運営に関しては図書室や体育施設などの開放の仕方や開放時の活動やイベントの企画、スタッフ確保といった課題があることを認識しました。この議論の延長で、新校舎の完成式や旧校舎の解体式を地域主導で企画しようというアイデアも持ち上がりました。

第2回公開ワークショップ

そうこうしているうちに、1年という限られた時間でしたが新校舎の計画をとりまとめる時期になり、2003年の2月末の日曜日に、計画の骨子を説明する第2回公開ワークショップが開催されました。日曜日の午後に開催したのは、前回の反省からです。また今回はどう進行するのかなぁと思いつつ会場の体育館へ向かうと、ステージ上には「公開ワークショップ」というパネルが掲げてあるだけでイスや机はなく、下のフロアにイスが円形状に並べられ、その中央に模型が置かれていました。今回も総勢70名ほどでしたが、一般参加者の4割弱は前回の公開ワークショップに参加しなかった人達でした。

・第2回公開ワークショップ
今回はフロアで円卓会議のように座って語り合いました。



・模型を前に議論白熱
途中で参加者が中央の模型に集まって、意見を交わしました。

委員長のOtさんから「みんなでつくるみんなの新しい石樽小学校に、気兼ねなく意見を言って欲しい」という挨拶で、2回目の公開ワークショップが始まりました。今回は建設委員だけでなく一般参加者が模型を見ながら質問できる時間があるなど、前回と比べて進行にも変化がありました。

計画案に対する質問としては、「鈴鹿山脈から吹き下りる冬の強い風への対策は？」とか「展望台を設けた訳は？」「地震が心配だが建物の構造は？」「みんなが思い入れのある桜や石垣などはどうなるのか？」などなど。

また、地域開放ゾーンの運営をどうするのかという質問も。「そもそも自分たちで管理ができるのか」「どんな利用ができそうなのか」という不安の意見もありました。建設委員から前回の公開ワークショップで行ったアンケートの結果が報告され、地域の人々が学校を様々な目的で利用したいという要望があること、そしてその多くを実現できるように計画されていることが説明されました。しかし、それを実際にどう管理運営していくのかについては話し合いを始めたところなので、これから一緒に考えて欲しいと、逆に投げかけました。

地域利用×壊れ窓理論＝子どもの見守り

さらに、今回も学校の安全に関する質問がありました。前回同様、あちこちから私への視線を感じ、私も前回と同じ話もどうかと思ったので、こんな話をしました。

前年、調査旅行でアメリカに出かけ、途中ニューヨークに立ち寄りました。今回はニューヨークの主要駅であるグランドセントラル駅のホテルに宿泊したのですが、20年近く前の学生時代にこの駅へ来た時の印象は最悪でした。浮浪者が寝転び、鼻を突くにおいが充満し、乗降客は足早に立ち去る。そんな駅でした。ところが今回訪れて、その変わり様にびっくりしました。清潔なコンコースに洒落たカフェやお店が並び、そこでお茶を楽しみ、ショッピングをするニューヨーカー達がいました。

これは当時のジュリアーニ・ニューヨーク市長が行った街の美化政策の成果なのですが、その背景にはひとつの理論がありました。壊れ窓理論（ブロークン・ウィンドウズ理論）です。簡単に説明すると、窓が壊された放置自動車をそのままにしておくと、次にはタイヤや部品が取られ、しまいにはそこで重大な犯罪が起こるというアメリカではよく見られる出来事から、窓が壊された段階、つまり小さな問題に気をとめてきちんと対処することが大きな問題を防止する有効策である考え方です。その方がコストも安く、またコミュニティの連帯感も生まれるというものです。

この話を引きながら、地域住民の日常的な来訪や管理運営の中で子どもたちを見守る体制を作ることが、結局は地域住民の結束を高め、地域コミュニティの拠点としての新しい石樽小学校を創ることになるのではないでしょうかと話しました。

これにはすぐに、「公共トイレの掃除をしているが、徹底的にやることで落書きがなくなった」と反応してくれた参加者がいました。後日開催された建設委員会（第17回）でも、「いろんな目が防犯につながるという話で納得した」「高い壁やカメラで監視するのは、農薬をふんだんに使って楽に稲作をするようなものだから、米同様に手をかけたい」といった言葉が聞かれました。こういった意見に、私もようやく少しお役に立てたかなと思うことができました。

この1年を振り返って

2回目の公開ワークショップでも、参加者の関心が完成後の管理運営に少しずつ移っていることがわかりました。アンケートからは、子どもたちとの交流とともに地域住民同士の交流を期待する声も聞かれました。その後の建設委員会（第17回）では、学校の安全確保とも関係しながら、地域主体の管理運営のためには日常的に誰かを配置することを考えた方がいいという意見も。さらに、少し時間切れだったが前回よりもいい調子で進んだという、ワークショップの進行に関する感想もありました。

そして、3月末に開催されたこの年度の最後の委員会（第18回）では、文部科学省に提出するパイロットモデル校としての報告書を確認しながら1年間を振り返りました。自分の意見が反映されたことを喜ぶ人もいれば、私のアイデアが採用されなかったことを残念がる人も。「このメンバーでこの後も継続して管理運営の検討や体育館・プールと屋外環境の計画をしたい」「早く利用者として訪れたい」、さらには「設計事務所がこういう仕事まで熱心に取り組むとは思わなかった」という率直な感想もありました。

私もこの1年間の取り組みを賞賛しつつ、これで燃え尽きないで気持ちを新たに次の課題に取り組んで欲しいとお願いしました。

不安と緊張から始まった建設委員会も、「石樽の皆さんは建設委員会の取り組みを評価してくれているけど、造るだけではダメ。使ってもらえるようにしないと」というOtさんの言葉で、1年間の奮闘が締めくくられました。